

加舎白雄の奥羽行脚について(上)

矢羽 勝 幸

今日「天明中興俳諧の五傑」の一人に数えられている加舎白雄(一七三八―九一)の生涯は、一応俳諧以前(元文三―宝暦中頃)、修業期(宝暦中頃―明和七)、発展期(明和八―安永八)、全盛期(安永九―寛政三)と都合四期に分類できるが、全盛期を除くほとんどの日々は旅行に費している。したがって紀行や旅吟、訪問先への贈答吟が多い。

白雄の多くの旅行の中で最も長距離の旅は、安永二年『おくのほそ道』のあとをたどった奥羽行脚の旅であった。蕉風俳諧の復興者として今日文学史に位置付けられている白雄にとってこの旅行の持つ意義は少なくともなかったはずである。従来この旅行は、「明和八年に行われた」(『宮城県史』十四卷)等、細部に涉り誤解のまま今日にいたり、その正確な事実が明らかにされることはなかった。白雄の伝記研究の一環として旅の終始と作品、その意義等を考察してみたい。

なお、右の奥羽行脚についてまとめた紀行文『奥羽記行』そのものの文学的考察は、紙数の関係により今回は割愛した。

この論文は、平成十年度二松学舎大学東洋学研究所の研究補助費をもって調査、研究したものである。

一、出立

安永二年五月十五日、白雄はかねてより計画していた『おくのほそ道』の旅に出立した。同行は、前年より伊勢松阪からつき従っていた斗墨と江戸の烏光の二人である。

出発直前、信州戸倉の坂井鳥奴に次のような書簡を送っている。⁽¹⁾

半輪下主人

玉章下

志ら尾

貴墨忝、とく貴報可申存候処ことしはやまとぢやくま野の果迄も見残し給はぬのよし、御句すじを察し候ゆへなりし。御安静に而御帰候哉。野事も無異にかねての松しま行脚、漸時ワたり候けん。斗墨・烏光を翹して当月十五日出立と相決候。御地へハ秋のころ可罷出、御まち可被下候。柴雨老人如何くられ候哉、可然御伝言可被下候。玉章どもあまたそれぐ及御相談遣候。此節立前なごりおしむ友どもあまたし。各襟にかくるものゝもよひかたぐとり込早ぐ申残候。以上。

五月十二日

³ 蜘蛛の子のちり迷ふ桐の葉裏かな

⁴ ぬれいろやわか竹藪に匏屑

など申捨候。貴評。

尚く、孚声・紗雀の二士、其外も御別条無之候哉、宜たのミ上候。以上。

尚く、記行のほくなどゆるく拝見申度候。いせへも御立寄候よし。簾雨・欄二の沙汰も御座候キ。

1 やまとぢ……鳥奴はこの年三月二十一日信州戸倉を出発、閏三月六日に伊勢参宮、呉扇・滄波・五蓬らと風交。のち長谷寺・三輪神社・法隆寺・唐招

提寺から吉野・高野山・堺・大阪・宇治を経て閏三月下旬京都に入った。帰途は中山道をとおり、四月二十一日に帰宅した。同行は戸倉の柳沢簾雨と欄二であった。白雄は鳥奴への返事が遅れたのは、旅中吟を待っていたからと弁解している。

2 もよひ。準備。

3 蜘蛛の……。神宮文庫本『白雄句集』に「蜘蛛の子のちりまどふ桐の葉裡哉」。

4 ぬれいろや……。新出作品。若竹の緑と鮑屑の白の対比をねらっている。

五月十五日江戸を発った三人は芭蕉のようにすぐ千住にむかったのではなく、下総の銚子をめざし、ここにしばらく滞在した。

銚子は柳居・鳥酔時代から縁の深い土地で『在し世話』を信ずれば、白雄もここで鳥明と出会っている。柳居・鳥酔がはじめて銚子と関係を持つのは寛保二年秋のことである。「戌の満水」で葛飾の三斛庵を失った柳居はやむなく門人鳥酔の郷里上総地引村に仮寓、両総を行脚して多くの俳人たちを門下に加えた。東金の雨林、曾我野の雨塘のほか銚子の寺井弄船もこの時入門している。このち宝暦九年秋、鳥酔は門人鳥明を同伴して両総地方を行脚、銚子でも多くの人々が鳥酔門に加わっている。しかし、その後建部涼幣の行脚などで弄船・蘭溪・竹郷ら十二名が涼幣に接近したりするが(宝暦十一年刊『はしのな』、涼幣の凋落とともに銚子地方は勢心な松露庵派となった。明和六年鳥酔が没するや市内台町の宝満寺に一門によって鳥酔句碑

二夜吟 鳥酔居士

かぞふれバ千艘白し月今宵

かぞふれバ帆柱へらず後の月

明和六己丑歳次仲秋望日

東都松露庵銚江社中合資樹立

が、建てられ、碑の下には鳥酔の遺齒、短冊、香木等が埋められ、記念集『月のふた夜』(半紙本一冊)まで出版されている。

『月のふた夜』には白雄(昨鳥)の句も載っているが、当時の銚子社中は市石庵弄船と夏霜観百井が中心で他に右の句碑のある宝満寺住職総洲・仙雪・釈秦舟・鳥朝・野冬・川鷺・荘鶴・市道・魚生・青波・千鷗・虎道・富扇・百雉・采山・松笠・青井・夜柱・亀毛・鳥舸、其風女・東花・梅里・鳥胤・鳥江・山瓜・星波・桂路・三市・釈鳥関・釈黄牛・二鳳・耳仙・虎溪の三十六名の俳人がいた。なお同書には「同郷同門之古人」として工藤鷺光、崎山鳥道・戸木南水・酒井白字・井上里耳・荻野百泉・伝田管吹・竹中楚竹・證誠院桜明・野崎芦水・有田眠水・飯塚紫暁・渡辺蘭溪(芦人)の古参鳥醉門の作品も紹介している。この中には白雄が明和二年銚子流寓中交際した人も入っているはずである。ちなみにこの鳥醉句碑はいつの頃か失われ現存しない。

寺井弄船とともに当時の銚子俳壇を動かしていた百井は、本名田中玄蕃貞胤、大手の醤油醸造家(ヒゲタ醤油)の八代当主であった。市内の名刹飯沼観音堂の裏に芭蕉・柳居・鳥酔の併刻句碑(現在散佚)を建立、桜千本を寄進したといわれる。寛政元年に他界している。⁽²⁾

さて、江戸を発った白雄・鳥光・斗墨の一行は、東金を経由して銚子に至った。『白雄贈答』の次の一連の作は、秋季になるが、前後関係からみて、この時の作品である。

井の水もふたり分ありしのぶ草、と鳥師の愛し給ひし土竜庵にあそぶ。これぞあるじが盤を撃て歌うたふ居なりけり。

荊より籬はふかし蔓さゝげ

銚子江弄船老人の青螺観にあそびて

入船の潮をはこぶ月夜哉

東金の雨林老人が道にひさしき友たり。こゝに人もしるひと木ありて秋ごとに門外にみどりをなす。

おもしろの寝ざめまくらやこぼれ椎

関口氏のもとにて

年を経てふたたび秋を出温のさと

銚子江蒼芦観にのぼりて

秋すゞし漂木も芦のとも戦ぎ

以下白河の烏黒訪問、船岡大光寺訪問と『奥羽記行』の作品が並んでいる。

右の句中「荊より」「おもしろの」の二句は東金で詠んだ作品であるが、江戸から銚子に向かう途時、東金に杉坂百明と雨林を訪うた事実を伝えている。百明は当時大磯嶋立庵主であったが、土竜庵も併称、時折東金にも帰っていた様子である。

雨林は東金の烏酔門の古参で名を飯田弥五兵衛正俊、かの伊能忠敬の縁籍に当り、天明元年に八十歳で没している。

銚子の蒼芦観は銚子本城村（本庄）の俳人烏朝の庵号である。鹿島屋（また三島屋）善太郎といい、明和二年白雄はこの家に滞在中烏明と出会い、入門した（『在し世話』。「此男や蕉門に志あつく、老師（烏酔）存命の頃より庵（松露庵）に月次句合といふものありて、是に一ヶ月もかゝさず三十里を咫尺にちぢめて文通常にす」（烏明『いけのむかし』）と烏明が記すように、白雄・烏明の離反後は烏明側についた。寛政三年三月二十七日他界している。

ちなみに『奥羽記行』後信州で刊行した『俳諧帛表紙』（安永三年刊）の銚子俳人は烏朝・百井のほか四光・胡笠の四名である。銚子滞在中四光・胡笠とも交際していたことはほぼまちがいない。

秋たつ日雨の降けり茅が軒 志ら尾

鳴子引て朽はつるか八里の翁 烏光

萩原に一先くハつと入日哉 斗墨

右の三句は安永二年八月十五日の観月を記念して花逕、百井、呉川、子得ら松露庵一門が発行した一枚刷(3)の末尾に「ミちのく行脚の文にきこゆ」として記されている。銚子滞在中の作であろう。

二、『奥羽記行』

銚子を後にした一行はどのようなコースをたどったのだろうか。その基本資料として

一、喚之蔵本『奥羽記行』（寛政七年刊、星布編『七とせの秋』に翻刻）

二、松宇文庫旧蔵『奥羽記行』（『春秋菴白雄居士記行』所収。天保四年写本）

二部の紀行が伝わる。前者の末尾には「師在せしとき喚之にゆづり給ひし奥羽記行のくさぐさを巻のはじめとす」と喚之の母榎本星布の註記が備わり、原本は白雄自筆によるものらしい。右両本を比較すると異同も少なからずあり、ここではまず喚之蔵本を掲げ、異同部分は後に追記することとする。翻刻に当っては読解を考慮し適宜濁点、句読点を補った。

奥羽記行

銚子江に日数とゞまりツゝその友どちがせちより水上十八里ひたちの国土浦までおくられし刀根川の夜泊に

(一)とまぶねやあツさぞのぼる藻の匂ひ

つく波から流て出たる天の川　二国橋上に杖をたてられし師が生前の一句なつかしく此夜筑波山中にやどる。ま事におどろく銀河のけはひ奇偶のいたゞきにかゝりて松杉のひまより流れいづるがごとし。先見るふたツの星は連珠のごとき中にあらはれてかたぶき落る月にひかりをかゝげミなの川の水音ハ軒をめぐって桴をもうかずツベし。咏嘆すにるはり筑波山ことの葉のかたみつきすまじくおもふ。つきすまじ。

(二)ふみづきやげにぐ夜筑波山

那須野

一郡を那須といひてすへ野越多かる。初ハはしばミやさゝぐりややさしきをめでツゝ行しがゆふぐれのたかゞや

おもてに覆ひて道ふミたがひぬ。せんすべなミ杖をたて、

(三) 野路の鹿里あるかたへしるべせよ

那須のゆもとの真中なぐるゝを霧流が深といふなるよし。

(四) ゆあがりや霧はながれて宵の月

殺生石

祖翁のあはれミ給ひしがごとく人を刺蜂のたぐひ、あるは蒼蠅の死せるあり、くるしむあり。蒼蠅くゝと忌憎るゝもいまさらにあはれなりけり。

(五) 露置ぬ石のおもてや埒のうち

道の辺の柳をけふこそ見るなれ。先のとし鳥師行李の帰るさ頌嘆のあまりに一枝を折て笠の端にさしはさミ、うつし植し今東道鴨立庵の一沢を覆ひてゆきゝの人をねむらす。一枝を折し罪を風流に換られしよ、楊柳情ある時ハ何ぞくゆべき。其柳この柳ともに枝幹みどりなり。西上人はむかしにして鳥師のおもかげ柳にそふて柳になツかし。

(六) 秋の柳をれくち淋しもしやそれ

顧ミおもふしら川や故園の情秋なをさびし。

(七) 関の戸やあふぎやぶれし秋の風

渉阿武隈川

(八) 秋水や埋木の瀬はいツこなる

日和田の駅より高倉へゆく道のかたはらに安積香山たちけり。あさかの沼ハかしの東勝寺といへるみてらのうしろにありと人のつけけるまゝに

(九) 浅香山かツ見てゆかん沼の秋も

安達が原の黒塚をたツね入しにあやしのいはやあやしの小家こゝかしこに重之のいもうと君すミ給ひしことふる
きふミに見へたるをおもひ出て

(十) くろづかやきぬうツ女住まじる

しのぶ文字摺石にむかふ。早苗とりてん小田も遠からぬ山あひにて石ハげにもうつぶせに風ワたる秋草の乱りい
ともさびしくて

(十一) 石はうツぶせに我は丹摺の袂かな

鯖野のさと佐藤氏の旧館をたツぬ。げにおもふ次信・忠信故郷はるかにひとりのミかふたり迄君のいのちにかは
りし事よ。こゝにいたりてふたゝび其篤を感じ侍りぬ。

(十二) いのちふたツ露やすからぬむかしかな

飯山のゆもとにきつきぬ。祖翁このところになやミ給ひて捨身行脚のしめしをかきのこされしかバたゞに涙袖を
しだツ。おもふにむかしや土坐にむしろを敷てと聞しがおふやけのみまつりごとおよびて中くゝに人家いまむツ
まじくたちならべり。

(十三) 土べたにしばしむしろを宵の月

伊達の大木戸を過つゝ下紐の関はゞかりの関なうちこゆるほど

(十四) 行まゝの関に指折あきさびし

たけくまの松にて

(十五) 松がもとふた木の露をうけしらむ

藤中将の古墳ハ塩手の里といふにありて箕輪・笠島にならべり。かたミのすゝきはところぐゝにおのれと露ちり

しきてとぶらふ人もまれくなるべし。

(十六) 草の花都も秋よしやきミ

名取郡の半をワしる名取川をワたる。

(十七) 落鮎も郡へだてぬ早瀬かな

萩の逕をワけこし虫の音の猶露けきあたりにきツきぬ。こゝをや宮城野といふなるよし。ものゝ哀はいひもツくすべからず。秋風にこゝろうごきておもひすゞろなりけり。

(十八) 宮城野や萩の下露川なさん

壺のいしぶみにて

(十九) いしぶみや朝獺どのゝ花もミぢ

冠川といふをわたりて十町ばかり左に里あり。こや菅菰をあミて十府の浦人とよまれしところなるよし。

(二十) すがごもや長夜をしりし尉が顔

しほがまの社頭にまいりツゝ塩土老翁と現じたまひし神代のむかしをたうとミて、

(二一) 秋久にはこぶ潮を神ごゝろ

すへの松山にて

(二二) 松やしる旅ゆくすゑの秋しぐれ

瑟くたる秋雨に三夜の月覚束なく塩がまの浦にかへりて日和まちせしに千里を遠とせずあゆミこし風運つきざるにや籬がしまちかく曇なき月まツ宵の影にむかふ。猶松島のおすの夜をちぎりて、

(二三) 我おもひまツに甲斐ある千賀の月

良夜

(二四) 松ふくやまつしまの月夜半過ぬ

十六日、日もすがら夜もすがらふりしくまゝに

(二五) いざよふやしらず雄島の雨の月

高館覽古

(二六) ちるや柳たゞつちくれの西ひがし

ひかり堂おがミテ

(二七) ふりし代のひかり身にしむ巻ばしら

最上川

のぼれバくだるいなふねのとやまとうたのえんなるには引かへて秋水のすさまじさいはんかたなき一鳥の声を兩岸の猿の声に聞なしツゝ五百重山たちまちあとになるにおどろかれ侍りて

(二八) 鷺の声落すなりもがみ川

ふく浦にて

(二九) ふくうらやかれふのすゝき海人が髪

見かへる磯ワづかにへだちておきツしほさゐいとしろかれどいたぶる波のとゞかざるきさがたの閑なるを感じつゝ桜がもとに春をしおもひ合飲の木かげに其实を拾ふ。祖翁の顰を働ふに似たり。これかれ秋の日やゝ斜に風景なを一瞬に転じて仰ツ俯しつなごりある夕なりけり。

(三十) たか波や象泻ハ虫の藻にすだく

鳥海山

(三一) かた尾根は霧のあなたやワたツ海

尾国といふところにて山路の露たのもしく九月九日宿をもとむ。やどのあるじ心あるものにて茱萸一枝・栗一盆をめぐむ。これを餐ひてひと夜の山居もとより長途の鬚髪ことの外に生たり。

(三二) みちのくもいで羽もあとよ菊の露

やひこやまにて

(三三) 朝日さす八彦は越のにしき哉

出雲崎ほどちかミ佐渡の孤州にうちむかひツゝ行にまして秋、けにあら波の布帆の行かひもたへて銀河のほか梁せるものハあらじな。

(三四) 佐渡よりやこがれに渉る鷹もがな

師在せしとき喚之にゆヅリ給ひし奥羽記行のくさぐさを巻のはじめとす。

三、旅程

右の『奥羽記行』を核として以下白雄一行の旅程と作品を確認する。

(一) 千葉県銚子市を後にした白雄たち一行は、旅の長途をおもって土浦市まで十八里、一気に利根川・霞ヶ浦を船航した。途中利根川で船中泊している。その折の吟「とまぶねや」は『春秋菴白雄居士記行』（松宇文庫蔵）所収『奥羽記行』（以下「松宇文庫本」と略す）では初五、中七と大きな異同がある。

我蛭も啼べき夜とや藻の匂ひ

蛭は「コクチバミ。イモリ。トハゲ」^(カ)（『増続字林集韻大全』安永七年刊）であるが、ここではイモリであろう。「我」は

不審、誤写であろうか。

土浦に上陸した三人は筑波山(二)の麓をめざした。筑波山神社に参拝したものであろう。そのまま山中に宿る。(二)の文章は師鳥酔の遺詠

つく波から流て出たる天の川

から二峰にかかる天の川、二星の美しさに及んでおり、宿った日が七月七夕であったことを想像させる。鳥酔詠は『鳥酔先師懷玉抄』(鳥明編。享和元年刊)によると

○ 筑波山 半空に立ならびたる男女の神山ありて葉山しげ山しげき人のお入まとひつもりて淵となりぬれば今宵二星にも思ひ合て詠深し

筑波から流て出たり天の川

が正しいようだ。右の句は筑波山から流れ落ちる男女川に七夕の天の川をかけたものであろう。

ちなみに一茶の名句として知られる

木曾山に流入けり天の川(『七番日記』)

は右の鳥酔作をヒントにしているはずである。

文章は松宇文庫本との異同が多いが、特に著しい点を示すと、末尾の「にるはり…」以下は「にるまり筑波山 御製および其外いふにやおよぶ。言の葉のかたミハすがのねのながく忍ぶ斗」とかわっている。

『奥羽記行』は、松宇文庫本とも一息に那須野(三)にかわっているが、旅行後門人八田其明に刊行させた『俳諧中表紙』(安永三年刊)の「以下見聞並文通」の部では

春雨やうつらくと鳩づかひ

下野日光萍玉

の一句を載せるところをみると、日光に同門萍玉を訪ねたはずである。日光までの経路は当時の一般的な交通の例に従うほかはないが、栃木県立図書館にレファレンスしたところ

1、筑波―下館―二宮―国分寺―栃木―鹿沼―日光

2、筑波―下館―二宮―上三川―石橋―壬生―鹿沼―日光

の二コースの教示を得た。距離的には2の方が近い。

元禄九年江戸から『おくのほそ道』をたどった天野桃隣の『陸奥衛』のコースは白雄のコースに近く、参考になる。桃隣は江戸から鹿島神宮に詣で、白雄らとは異り、船で霞ヶ浦東岸の玉造町、小川町を経て筑波山に登っている。

筑波麓十一面観音 門外ニ不動ノ濡仏。

みなの小川 此所峯ヨリ流れ落る。

禅定 両山男体、女体此外小社廿八社。

麓ヨリ二里登ル。かたのごとく難所、岩潜、岩の立橋、千尋の谷、春夏の中巔ニ茶屋五軒、魚肉酒禁断、馬耳峯の間十丁余有、頂上ニ登て四方を見るに眺望不レ叙。

右の外、霊山の奇瑞おほし。

土浦の花や手にとる筑波山

筑波根や^{スベツ}_{コケ}て転て藤の花

峯より山越の細道アリ。うしろへ下りて椎尾山西光寺、本尊薬師、桓武帝勅願所、所は自然の山を請て滝は木の間に落ル。

赤松の木末や^{ノタル}乗垂花の滝

一里行て桜川明神アリ。しだの浮嶋此辺也。此川下亀熊橋渡り行ば小栗兼高館、則小栗村とて旅人泊ル。

汲鮎の網に花なし桜川

是ヨリ宇津宮へ出て日光山。

筑波山の様子はそのまま、白雄たちの見た景色であったであろう。また下山後の西光寺（八郷町吉生の西光院であろう）、真壁町亀熊、協和町小栗、二宮の順路は、あるいは白雄たちもそのままどった順路であった可能性が高い。

白雄には確かに日光に遊んだことを証す次のような作品がある。

町中をはしる流よなつの月 白雄

右の句形は『しら雄く集』によるが、神宮文庫本『白雄句集』では「日光御幸町旅宿」の前書きで中七が「わしる流よ」と多少の異同がある。御幸町ごこうまちは今日JRの日光駅から東照宮にむかう途中の繁華な目ぬき通りであるが、白雄が訪れた当時も同様な門前町で、参詣客を泊める旅籠が軒をつらねていた。時代はやや下るが、慶応年間の記録『日光山森羅録』によると、当時の町の長さは二町五十五間、道幅は五間、家が四十四軒、人口は二三八人であったという。⁽⁴⁾天保八年、植田孟縉の著わした『日光山志』巻一に北雅筆の「日光入口東町 凡長十四五町許」という細密な絵図があるが、この図のほぼ中間位置に御幸町が描かれている。家は左右に整然と軒を並べ、広い道路（坂道）の真中には白雄が右の句に詠んだ小川が流れている。この小川は近世の宿場町一般にみられるもので特に珍しいものではないが、御幸町の場合道路の傾斜が強いためにその清烈感是一般の宿場を超えていたであろう。白雄作品はそこに注目したものである。

一つ気になるのは、作品と訪問時の季節が異なることである。七月に入っても利根川夜泊（巻頭句）の句のように夏の季を用いており、この年は特に残暑が厳しかったのであろう。白雄が日光を訪れるのは安永二年以外考えられない。

白雄がこの年日光を訪問したもう一つの理由は、先に述べた『俳諧帛表紙』の萍玉の入句である。同書は旅行後信州松代の門人其明に出版させたものであるが、編集はほとんど白雄の手になった。

萍玉は表1にみるようにあまり多くもない下野松露庵勢力の中核を成し、出句傾向より烏明の門人と思われる。白雄の既刊書『おもかげ集』、『田ごとのほる』、『加佐里那止』に出句しないのに、『俳諧帛表紙』だけに出句するということは、明らかに奥羽行脚の折白雄と直接交渉があったのである。履歴等一切が不明だが、安永中頃に他界したものが安永四年以降の

表1 松露庵・白雄系俳書にみえる下野俳人

合計	未詳	間中	日光				地名	編著	刊年
	杉隠	百尺	春草	夜柱	鷺橋	萍玉	俳人名 書名		
1	○						俳諧玩世松陰五編	烏酔	明和4
1					○		はいかる雲と鳥	烏明	5
1					○		はいかる南浦の春	烏明	6
2					○	○	俳諧武埜談笑	烏明	7
0							おもかげ集	白雄	7
2					○	○	辛卯歳旦	烏明	8
0							田ごとのはる	白雄	8
0							加佐里那止	白雄	8
2					○	○	俳諧月見ぬ庵	烏明	安永1
0							文ぐるま	白雄	1
2				○		○	簞のうち	烏明	1
1						○	俳諧古にし夢	烏明	2
1						○	俳諧帛表紙	其明	3
0							乙未春帖	烏明	4
0							春秋稿初編	白雄	9
1			○				春秋稿二編	白雄	天明2
0							春秋稿三編	白雄	3
0							春秋稿四編	白雄	4
1		○					春秋稿五編	白雄	5
15	1	1	1	1	5	6	合計		

加舎白雄の奥羽行脚について(上)

松露庵系俳書から姿を消している。

日光にはこのほか同時期鷲橋、夜柱という二人の俳人がいたが、出句傾向からみて白雄とは没交渉の様子である。また、白雄が烏明と袂を分ったのち、天明二年に刊行した『春秋稿』二編(白雄編)に、春草なる人物が出句するが、これもわずか一回だけで長続きしなかった。

『しら雄く集』(碩布編)に

下野無畏山普門禪寺眺望

階ひと歩く／＼に秋のけしきかな

という作品があり、季がこの時の旅に合っている。普門寺は『栃木県史』巻四寺院編に

足利郡菱村大字黒川字普門寺の山腹にある。当寺は上野国山田郡上久方村鳳仙寺の末派にして禅宗曹洞宗である。安政二年三月僧外の建立したものである。明治元年十二世の僧寺山禅喚に至る。本堂は縦四間半、庫裡西向なり。本寺は古昔天正元年由良成繁公桐生城を攻むる時、上野国新田郡世良田郷に安置しありし千手観音に祈願せしに其擁護ありて、一戦にして敵城を奪ひ取ることを得たと、桐生城平定の時、彼の千手観世音の聖像を菱郡中里山に移し、草庵を営み、香火修法をなさしむ。後彼の草庵を改めて一字を建立し無畏寺、普門寺と称す。其大悲閣は今寺境内に安置す。

とあるが、昭和三十四年一月より群馬県の桐生市に編入された。地図で確認をしてみるとなるほど足利よりも桐生に近い県境である。季節は確かに合致しているが、日光とは距離が遠く、おそらく別の折の訪問と考えられる。

(三) 那須野辺りからこの行脚の目的の一つ『おくのほそ道』の趣きが濃くなる。那須野は古来、道縦横に走り、迷路多いことを本情の一つとする歌枕である。

かり人のゆずゑふりたてちかへども

かさハたみえぬなすのたかがや

権僧正

(『夫木和歌集』)

白雄も高茅のために「道ふみたがひ」てようやく通過した。

松宇文庫本のこの段は特に異同が多く、

一郡を那須とよびてすへ野越多かる。始めハさゝぐりのさゝやかにハしばミのはしたなくも物ごとゆかしかりしが日暮の高茅面を覆ひ道ふミたがひぬ。せんすべなく杖をたて、

野路の鹿里有かたへしるべせよ

門人長翠が白雄七回忌に出版した『くろねぎ』所収の白雄作品も文章のみは右の系統に属するようで

一郡を那須とよびてすへ野越多かり。はじめハさゝぐりのさゝやかにハしばミのはしたなくも物ごとゆかしかりしが、日ぐれ高茅面を覆ひ、道ふミまよひぬ。

野路の鹿道あるかたへしるべせよ 白雄

「道あるかたへ」の句形は、小島麦二の『今古家集』にも同形で入集するから単なる長翠の誤字ですますわけにはいかない。

白雄一行は、芭蕉のように黒羽町にむかわず、そのまま那須温泉(四)に宿った。

(五) 殺生石は那須温泉の裏山のような位置にある一塊の熔岩である。白雄の訪れた頃もなお有毒ガスを噴き出していたが、三年前(明和七年)の夏ここを訪れた暁台は「往年山なだれ、石は土中に埋めさだかならねど其あたり毒氣猶うせず、螻蟻の類ひ是にふるゝものたちまち死す」(『二編しをり萩』)と記し、殺生石が土中に埋没していたことを報じている。

さて、この文も松宇文庫本は異同部分が多い。

殺生石ハ山根に有。蕉翁の憐ミ給ひしがごとく人を螫蜂、ひとにつく虻、蒼蠅の死せるあり、苦む有。蒼蠅くゝと忌

憎まるゝも今更に哀也けり。石の毒氣おそろしともいはんかたなし。

白雄は去來の遺したといわれる

誹諧はものを憐むことを要領とす。ものをあはれむとハ艸木の霜にあひ、鳥獸の寒暑にくるしむや、されば道路にふしたる乞兒に対して面そむかば一句にむすぶ事あたはじ。不便とおもふの心は則風雅の一句なり。

をよく門人へ書き与えているが、右の文も殺生石よりその周辺にもがき苦しむ害虫に焦点をあて、しかも害虫と人間を同等の位置で描いている。白雄の視点の低さ、風雅觀のうかがわれる好文といえよう。

(六) 芦野の遊行柳も『おくのほそ道』の旧蹟。文中の「鳥師」はむろん師白井鳥醉であるが、鳥醉の奥羽行脚は宝曆二年である。⁽⁵⁾この時芦野に遊行柳を訪れ、記念に一枝を手折って帰った。その柳はあちこちに植えられたのち明和五年鳥醉が西行ゆかりの大磯嶋立庵に入庵した折、庭内に移し植えられた。嶋立庵には右の來歴を記した円柱型の石碑(上部欠損、高さ七五センチ、円周六二センチ)が現存するが、鳥醉入庵記念集『湘海四時』の挿絵によるとは上部に後生車がつけられていたことがわかる。

『奥羽記行』の本文は松宇文庫本、『くろねぎ』下巻とも多少の異同が認められる。

芦野をあとにした白雄らはそのまゝみちのくに入り白河の関(七)を訪れた。白雄作

関の戸やあふぎやぶれし秋の風

の扇の破れは出立からの時の流れの長さを意味しているが、扇を出したのは暁台の先行作(明和七年刊『二編しをり萩』)に拠るものであろうか。

としごろおもひかけし関の古道いままきにこゆべしとは、みぬ世の友にさしむかへる心地せられて何とはなくちからありし。故人衣を潔て冠を正すときく。一囊を掖^{フキ}にし荆棘をまとひて枕をさだむ。孤貧の行脚たゞ扇一本に威儀をととのへ飄々としていたる。

白川を前に扇の切目セメさらん 暁台

さて松宇文庫本は先の白雄作に続いて次のように記す。

関越へて只々広し国の秋 斗墨

何足の艸鞋はきけん関の秋 烏光

階行(備)せし二人(ママ)りの吟也。ひとりはとく亡人の数にさへ成ぬ。

「階行：」は左註であるが、亡人となったのは烏光である。この奥羽旅行の無理がたたって安永三年夏病臥、「保養ながらかみつしもつふさ行脚致候処ふたゝび病ひつきて」（白雄書簡）九月十九日、千葉市蘇我町の同門小河原雨塘宅で客死した。雨塘は薄冊ながら追善集『露の秋』を出版しその霊をなぐさめている。

したがって、「階行：」の文は、安永三年以降に書かれたことは明らかで松宇文庫本の成立を考えるうえで参考になる。

白河の関における斗墨作品は、『三冊子』（『赤さうし』）にみえる「早稲の香」の例のように大國に行ったらその位をわきまえて句作せよといった芭蕉の教訓をふまえている。烏光の句は白雄同様歌枕白河の関の本情「白川の関八月日をこえて行よしを読み」（元禄五年刊『哥枕秋のねざめ』）に則っている。

無事みちのくに入った三人は、そのまま白河の町に入り俳人烏黒を訪問した。白雄の贈答作品のみを集めた『白雄贈答』という写本に

みちのく行脚のころ白川の烏黒をとひて

関越し秋風のためと先見せん

と、『おくのほそ道』になぞらえた挨拶句を贈っている。袂の秋風が秋の旅人のさびしい旅懷を言い得ている。

烏黒は白河城下天神町の酒造家山本屋の主人で本名藤田太兵衛。二松亭とも号した。享保四年、達季の子として出生、家督をついだが、家業より俳諧を愛し、弟孫十郎忠英に家業を譲り十七歳で江戸に出た。俳諧を烏醉に、書を平林惇信に学び、

四十歳で白河に帰り、天神町に隠棲、書や俳諧を教えた。旅行もよく行った様子で『鳥酔先師懷玉抄』(鳥明編)に九州行脚に旅立つ鳥黒に与えた鳥酔の餞別文が収められている。天明二年四月三日、六十四歳で他界した。享年六十四。法名を鶴翁道寿居士といい、市内関川寺に葬った。墓の傍らにその二十一回忌に門人らの建立した

山川のおとは沈て若葉かな
の句碑がある。⁽⁶⁾

鳥黒と也寥は東北地方における鳥酔系俳人の双璧である。

白河には表2にみるように鳥黒のほか東鳥・衡遅という鳥明、白雄に心を寄せる俳人がいた。東鳥は、その号のあり方より鳥黒の縁者を想像させる。衡遅は鳥明の門人であろう。『おもかげ集』以下白雄の編著一切に作品をみせない。『俳諧袋表紙』にも作品がないところをみると、この時白雄は訪問しなかったのであろう。

白河の関に近い東白川郡棚倉町に鳥明門下と思われる登宵・松柯がいた(表2)。この二人は明和期の白雄編著にはまったく作品を見せないが、唯一奥羽行脚後の白雄代編書『俳諧袋表紙』のみに登場する。表2の出句のあり方からみて旅中対面した可能性が高いが、贈答作品等一切が伝わらない。棚倉は近世常陸太田街道の宿駅で小笠原氏六万石の城下町であった。諸九尼の旅行記『秋風の記』(明和八年旅行。安永初年刊)にたまたま棚倉で宿った民家でその家の若い女と白浪風の男が密会する場面が克明に描かれている。白雄の訪れた(?)二年前の出来事であるが、『秋風の記』は白雄の旅程と一部重なるうえに同一人物が登場することが多く、参考になる。

『北越記行』(『春秋菴白雄居士記行』所収。松宇文庫蔵)は、一部旅行中訪問した人々に対する贈答句を収めているが、『奥羽記行』の場合、鳥黒等明らかに対面し、贈答句を作っているにもかかわらずそれを故意に除いている。したがって、奥羽行脚の実態は紀行以外の周辺資料にも目配りしなければならぬ。

(八) 阿武隈川は日光国立公園の三本槍岳を水源として白河の関の北を流れている川であるが、この作品は松宇文庫本と

大きな異同がある。

埋れ木の瀬はいづこなる秋しぐれ

歌枕阿武隈川は「千鳥・七瀬・せゞの埋木・しがらミ・汀」(松下誠明編『歌枕秋のねざめ』元禄五年一月刊)を詠むのが通例である。白雄もその本情をはずしていない。この作

ふかき秋にあぶくま川ハしぐるれど

色こそみえねせゞの埋木 康光

(『松葉名所和歌集』)

との関連が気になる。

白雄一行は奥州街道を須賀川・郡山とひたすら北上、郡山市日和田の歌枕安積山を訪れる。安積山の所在については今日諸説があり『和哥名所秋の寢覚』等は郡山市の西にある額取山ひたいとりやまとし、『おくのほそ道』では日和田の安積山を訪れている。白雄たちも疑うことなく日和田を訪れた。

その近く安積沼も

陸奥の安積の沼の花かつみかつ見る

人に恋やわたらん

(『古今和歌集』)

以来歌枕として知られるが、白雄句「かつ見て」は、右の「花かつみかつ見る」の用法を利用している。同趣の歌は

浅からぬ朝香の沼の花かつみかつ見る

色に出にけるかな 定衡

契こそ浅香の沼の花かつみかつみる

加舎白雄の奥羽行脚について(上)

色に露ぞこぼるゝ 俊成女

(『松葉名所和歌集』)

などきわめて多く、白雄もこの古典的用法を巧みに撰取したのである。ちなみにこの句は松宇文庫本では

安積山かつミて行ん寺の秋

と大きな異同がある。「寺」では本来句にならない。

東勝寺は水戸藩彰考館員丸山可澄(運平)の旅行記『奥羽道記』(元禄四年成⁷)には「右日和田宿左ノ方東勝寺ト云行人寺アリ蛇骨ニテ造ル地藏アリ此後谷合ヲ安積沼と云不分明」と紹介されている。

その後白雄一行は安達郡本宮下町(本宮町)の俳僧青龍を訪問したことと推定される。『俳諧袋表紙』に青龍の一句が採られているからである。青龍は本宮下町の宝蔵寺(天台宗)の住職でころく庵、曇華仏とも号し、この地方きっての俳人で後述の塩田冥々の師匠にあたる(『二本松藩奇人伝』)。このほか秋夫、万象、五陵ら天明から化政期にかけて活躍する本宮俳人たちを指導した。宝暦三年刊行の『今ぞむかし』にすでに投句しているところからみると白雄より相当年長であろう。寛政十一年他界している。享年未詳⁽⁸⁾。

白雄門人として知られる本宮の塩田冥々は通称を茂兵衛、名を為春といった。寛保元年郡山の佐々木家に生まれたが、四歳の折本宮の叔父塩田長十郎の養子となり、その蚕種業を継いだ。俳諧を青龍に学ぶほか書法をよくし「筑前の大守わざわざ招き給ひて太宰府天満宮の扁額を揮毫せしめらる」(『冥々集』)ほどであった。

白雄への入門はおそらく青龍の紹介によるものであろう。天明中頃と遅く、『春秋稿』五編が初出である。天明初年白雄と対立関係にあった百明の『市中の閑』に作品がみえるし、天明四年百明も奥羽行の折冥々を訪い、その別荘で呑溟、秋夫、泉之も加わり五吟歌仙を巻いている(『奥往来』)。

天明六年十月十六日、松烟墨を土産に白雄を訪問、春鴻を加え三吟の歌仙を巻いている。

めでたき松烟を袖にせし人に酬ふ

する墨の香をつく宿のしぐれかな 白雄

鄙のたよりに袖寒きころ 冥々

このやぐら馳のかよひしづけて 春鴻

(下略)

『白雄贈答』では右の発句の前書きが「めでたき松烟を袖にせしみちのくの冥々に吵ぶ」となっているが「吵」は誤写であろう。

この初対面の折の出来事を『俳諧名譽談』(三森幹雄著)は

一とせ白雄師の春秋庵を訪ひ、慢言して云、南山の竹おのづから直しと。白雄師是を聞いて曰、是に根をし是に羽をし猶射る事深からんといへば冥々速に言を改めて門入せりと云。

と記述するが、これは子路が孔子に入門した折の逸話を剽窃したものであろう。漢の劉向の『説苑』建本篇卷三に次のようにみえる。

孔子謂子路曰、汝何好。子路曰、好長劍。孔子曰、非此之問也。請以汝之所能加レニ之ヲ以テ学ヲ豈ニ可レシヤ及フ哉。子路曰、学モ亦有レカ益乎。孔子曰、夫レ人君無キハ諫ノ臣一、則失フ政ヲ。士無キハ教ノ友一、則失フ徳ヲ。狂馬ニハ不レ積テ其ノ策一、操レテ弓ヲ不レ返セ於槩ニ、木受テハ繩ヲ則直ク人受テハ諫ヲ則聖ナリ。受テ学ヲ重テ問孰レカ不レ順成一。毀レ仁ヲ惡レ士ヲ、且近ニ於刑ニ。君子不レ可ニ以テ不レレアル学バ。子路曰、南山ニ有レリ竹、弗レシテ揉メ自直シ、斬ツテ而射レバ之ヲ通ル於犀革一。又何ソ学コトヲ為シ乎。孔子曰、括シテ而羽レ之ヲ、鏃シテ而砥レ之ヲ其ノ入コト不レ益深カラ乎。子路拜シテ曰、敬テ受レテ教ヲ哉。

冥々はたしかに覇氣に富んだ氣性であったから右に似た逸話もじゅうぶん考えられることだ。

寛政七年、闌更・成美・重厚・乙二らと『俳諧八儂歌』(丈左編)に数えられているように冥々は化政期の東北俳壇を代表する一人といつてよい。文政七年閏八月二十二日、自宅で病死した。享年八十四(一説に八十六)であった。

本宮からおよそ十キロに安達ヶ原の黒塚(十)を訪ねた。この段は松宇文庫本とくらべ異同部分が多いので以下に全掲する。

安達が原を尋入にあやしの岩屋あやしの小家所々にあやなし鳥のつかの間八とまれかくまれ重之朝臣のいろと君住玉
ひし事など所がら哀ふかくて

黒塚やころも打女住まじる

重之の妹君は『拾遺集』巻九の平兼盛

みちのくになとりのこほりくろづかといふ所に重之がいもうとあまたありとききていひつかはしける

みちのくのあだちのはらのくろづかに

おにこもれりときくはまことか　かねもり

や『大和物語』をふまえている。右の源重之にも次の歌がある。

思ひやるよその村雲しぐれつつ

安達の原はもみぢしぬらん　重之

白雄作品の「女」は重之の妹に利かせている。

(十一) 信夫文字摺石は福島市の郊外。文中の「石ハげにもうつぶせに」は『おくのほそ道』の「昔ハ此山の上に侍しを
往來の人の麦草をあらして此石を試侍をにくみて此谷につき落せば石の面下さまにふしたり」を確認した表現。句は松宇文
庫本は

石にもものいふ我ハ丹摺の袂哉

歌枕信夫山は「おほく忍心によそへて忍恋などよめり」（『哥枕秋のねざめ』）。

いろみえぬこれや忍ぶのすり衣

思ひみだるゝ袖の白露 常磐井入道前太政大臣

しほるゝもしる人もなきたもとかな

これやし**のぶ**の岡のかげくさ

前齋宮河内

など古歌にも忍ぶ涙に濡れる袖袂として詠まれた例が多い。白雄作品「丹摺の袂」も赤い涙の隠喩であろう。

（十二）鯖野は旧信夫郡飯塚村佐場野のことで藤原秀衡の臣で信夫郡の庄司をつとめた佐藤元治の居館のあった地。白雄一行も『おくのほそ道』に順ってここを訪れたのである。松宇文庫本は句文ともに異同がある。

鯖野の里佐藤氏の旧館を尋ぬ。げにやおもふ次信・忠信故国遙にひとりのミかハ八嶋のあだ浪、よしのゝ嵐、爰にいたりて其篤を感じ侍りぬ。

命ふたツ露やすからぬますら哉

また「春秋菴白雄」と署名する天明期の真蹟が伝わる。松宇文庫本等とも異なるので紹介しておく。

鯖野の里佐藤氏の旧館をたツぬ。げにやおもふ次信・忠信故郷はるかにひとりのミかハ八嶋・吉野に君の命にかはりしことよ。こゝにいたりて其篤を感じ侍りぬ。

命ふたツ露安からぬむかし哉

右奥羽行李吟 春秋菴白雄 印 印

元治の二人の子のうち兄の継信は屋島で戦死、弟の忠信は吉野山で僧兵に襲われた義経の身がわりとなって奮戦、京都に潜伏中自刃した。

白雄と同時代に行われた蝶夢編の歌枕・俳枕集成『俳諧名所小鏡』（天明二年、寛政七年刊）をみると、『おくのほそ道』

によって世に知られた高館や実盛墓、その首洗池、巴女墓(俱利迦羅峠)、義貞墓などの古蹟が採られているのにこの佐藤兄弟の墓は立項されていない。載せるべき作品が少なかったのかもしれない。

(十三)の飯山は飯塚(福島市飯坂)の誤写であろう。芭蕉は『おくのほそ道』の中でこの地で「宿をかるに土坐に筵を敷てあやしき貧家也。…持病さへおこりて消入斗になん。…遙なる行末をかゝえて斯る病覚束なしといへど羈旅辺土の行脚捨身無常の観念道路にしなん。是天の命なりと」改めて漂泊者の覚悟をきめている。曾良の随行日記によるとそれは多分にフィクションの可能性が高いが、白雄は素直にそれを信じ、感涙にむせびながら豊かになった飯坂の温泉町とそれをもたらした為政者の善政を賛美している。

(十四)伊達の大木戸は桑折の東北およそ八キロ、福島と宮城の県境に近い。かつて下紐の関ともいわれた関址で

あづま路のはるけき道を行きかへり

いつかとくべき下紐の関 太皇太后宮甲斐

(『詞花集』)

など早くから和歌に詠まれているが、白河の関、無耶無耶の関等と比べて歌人たちの関心がうすく近世の名所和歌集にはほとんど採られていない。

近世では伊達大木戸と下紐関は別とみられていた様子で『俳諧名所小鏡』では項を改めているし、白雄の文にもそれがうかがわれる。

宮城県に入った白雄たちはそのまま奥州街道を北上、白石市に岩間麦羅を訪ねた。紀行にはみえないが『俳諧袋表紙』には麦羅の一句が収められている。

麦羅は化政期の東北地方を代表する俳人松窓乙二の父。白石城主片倉氏の菩提寺千手院の住職で名を清馨といった。明和八年、女流諸九尼は『秋風の記』の中で「伊達の大木戸、判官どの、腰かけ松などいふを見て過けり。越川にとまる。十日、

白石の城下、千手院とて験者のおはしける。風雅の道には麦蘿とて名高しと聞て尋ねけるに浅からずもてなされて日高けれど宿る。」と記しているが、乙二に劣らず著名な存在であったことがわかる。文化八年没後十七回忌を記念して門人鬼子によって句集『麦蘿念仏』が刊行されている。

白雄も麦蘿の存在を認めた様子で以後『春秋稿』初編、四編と麦蘿の作品を載せている(表2参照)。

麦蘿の後に訪れたのは宮城県柴田郡船岡町の大光寺住職也寥である。也寥は也寥とも書くが伊賀上野の出身で蕉門服部士芳の縁者、俗名を碓氷宗一郎といった(『むつのゆかり』)。十五歳で出家、加賀大聖寺の某寺(曹洞寺)、能登の総持寺等に修学し、法名を環中道一といった。父碓氷民部之輔清光(俳号梅子)が土芳の門人であったこともあって幼少より俳諧を嗜み、宝暦六年、大坂壬生の浄春寺時代に同寺境内に金竜庵を結んだ白井鳥酔に師事、海雲庵也寥と号した。その後東海地方の寺に住んだが、明和初年、奥州船岡の大光寺十四世に転じ、近郷の俳諧を指導した。当時奥州地方では也寥を芭蕉の甥または従甥などと伝え、也寥自身それを吹聴していたふしがあるが正確なことは不明である。明和五年大光寺に芭蕉句碑を建立、記念集『月夜塚集』を刊行、同七年平泉高館にも芭蕉の「夏草や」の句碑を建立(現在、毛越寺に現存)した。多くの芭蕉遺墨を所蔵し、俳人間に珍重がられた。安永八・九年頃仙台向山の宗禅寺に移り(二十四世住職)、天明四年二月五日に遷化している。享年未詳。⁽¹¹⁾

也寥は先師鳥酔ゆかりの人であり、その芭蕉遺墨拝観の目的もあって大光寺を訪れたものであろう。安永二年以前に両者が対面したことはどうもなかった様子である。

船岡大光禅刹にやどりて

よく寝て目ざめし時や秋の声

(『白雄贈答』)

この滞在中白雄は也寥に参禅し、痛棒をうけた。白雄の覇気と実力を見ぬいた也寥は、今は亡き鳥酔も懇望していた芭蕉

手沢本『枕表紙』を白雄に託して江戸の松露庵に寄贈した。白雄はその貴重書を頭陀に収め、芭蕉ゆかりの地を巡ったのち、同年の芭蕉忌を信州松代で挙行、集まった俳人たちに『枕表紙』を披露した。その記念集が翌安永三年に刊行された『俳諧帛表紙』(其明編・白雄代編)である。

『枕表紙』や也寥を中心とした船岡俳人たちについては後に稿を改める。

船岡をあとにした一行は、ひたすら『おくのほそ道』の古蹟を訪ねて北上する。岩沼市内、阿武隈川の北岸にある歌枕武隈の松(十五)を訪れた。

ついで『おくのほそ道』にもみえる名取市笠島の藤原実方の塚(十六)を訪れた。松宇文庫本は異同が多いので次に全文を引く。

藤中将の古墳ハ塩手の里といふ所にありて道祖神の宮たち 近く箕輪・笠島にならべり。かたミの芒折しもます(ママ)うも露ちりしきとぶらふ人も稀々なりけり。

草花の都も秋よよしや君

二年前ここを訪れた諸九尼も

十二日、笠嶋の道祖神にぬかづく。宮の奥なる実方中将の御墓所をたづね見るに、一村すゝきの生茂りたる中に苔むせるしるしあり。峯のあらし梢の蟬をのづから哀を催す。やがて帰なんと思ふだに、旅はものうく、都の恋しき習ひなるに、かゝるわびしき山の中に跡をとめ給ひぬる事のいかばかりかはと、ふりにしむかししのぶにもなみだぞこぼれける。草をむすび手向となして過ぬ。

(『秋風の記』)

と白雄と同様の感慨をもらしている。特に当時京都に住んでいた諸九尼には実方の立場や心情がよく理解できたのであろう。そして白雄一行は名取川(十七)を越え仙台に入った。名取川は歌枕で古来「御湯、みちのく、信夫原月、瀬々の埋木、

築、五月雨……」（重頼編『佐夜中山集』）などを詠んだ。白雄もその例にならって川瀬を詠んでいるが、埋木はすでに阿武隈川で詠んでいるので落鮎を入れて季とした。落鮎は当然「築」とも無関係ではない。

白雄らは大国仙台に入りながら『おくのほそ道』同様、繁華な城下を一切無視して歌枕宮城野のみを詠んでいる。しかし事實は紀行には記さないが白雄は仙台で数人の俳人たちに会い、門人も得ているのである。

仙台俳壇の当時の状況と白雄については後に稿を改める。

仙台では伊達綱村以来歴代藩主の御霊を祀る両足山大年寺（黄檗宗。仙台市長年字茂ヶ崎）を訪れている。それは紀行中にはみえないが『しら雄く集』に次の作品が収められている。

みちのく行脚のころ両足山にて

門に入れば僧遙なり秋の風

宮城野は東北地方を代表する歌枕であるが、和歌の初見は『古今和歌集』の

みさぶらひ御傘と申せ宮城野の

木の下露は雨にまされり　よみ人しらず

である。以後

正治百首歌奉りける時

宮城野の小萩をわけて行く水や

木のした露の流なるらん　正三位季経

（『続後拾遺集』巻四）

など類想の歌が詠まれているが、白雄もそれらをうけて

宮城野や萩の下露川なさん

加舎白雄の奥羽行脚について（上）

と詠んだ。下五は写生をはなれているので表現に奇異な印象をうけるが、しっかりと古典をふまえているのである。松宇文庫本では上五の切字が「の」にかわっている。

(十八)の句文を記した白雄の真蹟二幅(いずれも天明期の筆蹟)が現存する。句文とも紀行本文と本質的な異同はないが、参考までに紹介する。

其一

萩の逕をワけこしつゝむしの音の猶露ふかきあたりにきつきぬ。こゝをや宮城野といふなるよし。ものゝあはれはいひもつくすべからず、秋風に心うごきておもひすゞろなりけり。

みやぎ野や萩の下露川なさむ 白雄老人 印 印

其二⁽¹²⁾

萩の逕をワけこしつゝむしの音の猶露ふかきあたりにきつきぬ。こゝをや宮城野といふなるよし。ものゝあはれはしらず、秋風に心うごきておもひすゞろなりけり。

みやぎ野や萩のした露川なさむ 白雄 印 印

白雄の訪れた頃の宮城野は苦竹村と南目村の入会の地であり、仙台藩ではわざわざここに野守をおいて保存策を構じていた⁽¹³⁾という。

白雄は右の句のほかにも宮城野でもう一句作っている。安永二年冬、梧庵に宛てた手紙に報告したもので

宮城野

草まくら乞食も萩の夢や見る

全集に洩れた新出句である。乞食は白雄自身かもしれない。

陸奥行脚の比宮城野のすゞむしとてやどりをなぐさめられしに、その野の鈴虫は都へもめさるゝよし承りて

鈴虫よ関の戸越し友恋か

(神宮文庫本『白雄句集』)

仙台滞在中白雄に宮城野の鈴虫を贈った俳友がいた。きくと、その鈴虫は遠く都へも送られているという。白雄は多くの関所を越えてはるか遠くの都へ送られていく鈴虫の境涯に懐いを寄せ、その友達になった心境で右の句を詠んでいる。「俳諧はものを憐むことを要領とす。……不便とおもふの心は則風雅の一句なり。」を俳諧指導の核にすえていた白雄らしい、心やさしい作品である。

仙台から松島に向う途中、壺の碑(多賀城碑。十九)を訪う。芭蕉が「疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を関す」と感涙にむせんだ古碑である。碑の真偽論争は今にかまびすしいが、現存の碑には「天平宝字六年」(七六三年)と刻まれている。白雄句の「朝獺どの」は碑文に「天平宝字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獺修造也」とある人物で蝦夷地経略の拠点多賀城の修造者であり、同時にこの碑の建立者。惠美押勝(藤原仲麻呂)の子であるが、この碑を建てた二年後父が孝謙天皇に謀叛したために父とともに誅せられている。

白雄作品は、その古碑に刻された朝獺殿を「花もミチ」と讃える。「花もミチ」は「春と秋との美の象徴であり、はなやかなものや愛らしいものにとえてもよく用いられる」(佐伯梅友ほか編『例解古語辞典』三省堂)言葉である。つまりこの句は永い風雪に耐えて歴史に名をとどめた朝獺を讃美している。朝獺の悲惨な最期を承知してこの句を読むとなかなか味わいが深い。この句法は鳥酔が鯖野の佐藤兄弟の墓をみて詠んだ「残る石に跡さきはなし花紅葉」(『鳥酔先師懷玉抄』)から学んだものであろう。むろんこの句には『おくのほそ道』壺碑の段の「不易」の主旋律が響いている。

歌枕十符(二十)も『おくのほそ道』芭蕉由縁の地。もともと特定できなかった土地だが、十七世紀中頃には仙台藩の保護のもと宮城郡岩切村(仙台市)に定着していたという。岩切は多賀城の西方わずかの位置でJR東北本線に岩切駅がある。白雄の文に「浦人とよまれし」とあり、『詞枕名寄』(万治二年刊)等にも「十符 浦」として

水鳥のつらゝのまくらひまもなし

むべさえけらしとふのすがこも

大納言経信 (『金葉集』)

霜はらふ鴨のうはげやいかならん

とふのすがこもさゆるよなく 河内

(『堀川百首』)

等の例歌を掲げている。

松宇文庫本ではこの点をもっと明瞭に記しているので次に掲出する。

冠川といふも渡りて十町斗左に里有。こやすが菰をあみて十府の浦人とよまれし所成よし。浦のさまハさらになきを
いにしへ今の趣おもむきなるべし

すが菰や長夜を知りし尉が顔

冠川は岩切(伐)川とも七北田川とも呼ぶ。天野桃隣の『陸奥衛』(元禄九年)にはこの辺りの様子を

仙台より今市へかゝり冠川土橋を渡り、東光寺の脇を三丁行テ岩切新田と云村、百姓の裏に十符の菅アリ。又同所道

端の田の脇にもあり。両所ながら垣結廻し菅を彼百姓が守とならん。

刈比に刈れぬ菅や一構

と伊達家に保護されていた十符の菅の様子を半ば批判的に紹介しているが、それから五十六年後(宝暦二年)ここを訪れた
鳥酔も

岩切村冠川あたり近きに百姓佐左衛門といへるものゝ後に十尺ばかり四方の菅田あり。名のみ末枯て寂し。我三符に
寐んとよめるむかしを聞ば

今は鳴の寐るにもせまし十符の音

と記し、農民の名を明らかにしている。白雄の訪問はさらに二十一年を経るが、やはりこの保護された農民を描いている。十符を詠んだ歌はみちのくの厳しい風土や貧寒な生活に取材したものが多し。白雄もこの点をふまえ菅菰作りの老農に焦点を当てたのであろう。

岩切からわずか北上すれば塩竈である。白雄らはその塩竈神社に詣でた。塩竈神社の主神は塩土老翁である。この神について大場雄淵の『奥州名所図会』卷三（未刊稿本）では次のように記している。

伊弉諾尊の御子、事勝国勝長狭、またの名は塩土老翁にて在す（『神代卷纂疏』云く、塩土老翁は始めて海を煮て塩をつくるの神なり。この神は伊弉諾尊の子なり。『和事始』）。神代の時：己命は東国潮満来の塩竈の浦に天降り、咸能強暴邪鬼及び荒夷を摧伏、他邦を防ぎ護り、神代には、奥羽一州たる大国を平治し、辺要を守護し、後世の按察使の任の如く鎮り在す。……塩土老翁も、三柱の大神の御連枝にて八百万神に異り、武勇忠誠にして辺要を守護し、且つは海潮を製し、食塩をして養生救ひ、長寿なさしめ給ふ。

白雄の「秋久に」の句は崇神の念のうかがわれる作品であるが、これもまた鳥酔の日光での詠「湖に秋の塵なし神ごゝろ」（『鳥酔先師懷玉抄』）から学んだものであろう。

塩竈まで来ると目的の松島は眼前であるが八月十四日にあわせた時間調整であろうか、少々逆もどりして多賀城市八幡の末の松山（二二）に赴いた。『奥州名所図会』初編に「末松山。八幡村の中に寺あり、末松山宝国寺といふ。寺の後に高岳あり。岡上に青松数株あり。この地すなはち末の松山なり。海浜を去る事十余里。」として挿絵がある。もともと末の松山はどこをさしたものが不明であったが、例によって仙台藩の名所調査の折、強引に右の地に比定されたものでその根拠は薄い。

末の松山が初めて登場するのは『古今和歌集』の

君をおきてあだし心をわがもたば

末の松山浪も越えなん よみ人しらず

浦ちかく降りくる雪は白浪の

末の松山越すかとぞ見る 藤原興風

の二首であるが、特に前者の恋の破綻は以後この歌枕の本情の一つとして定着した。芭蕉もここを訪れて「松のあひく皆墓ハラにてはねをかハし枝をつらぬる契の末も終ハかくのごときと悲しさも増りて」と記している。

白雄作品も旅人という現在の境涯に人生の老境のさびしさ、わびしさを隠喩している。恋したり、その愛を裏切ったりして迎えた人生の末のわびしさを千年の齢を重ねてきた松は知っていることだろう、の意。歌枕の本情をふまえつつ、それに自己の境涯を重ね、重厚な作品にまとめている。座五「秋しぐれ」は先師鳥酔のここでの詠「松山や来て袖しぼる露しぐれ」(『鳥酔先師懷玉抄』)に学んだものであろう。

松字文庫本は前文がほとんどかわり、次のようになっている。

長途半にたらぬ此身や末の松山に望みて松の思はん事もはづかしく旅情袂にしたツ。

松やしる旅行末の秋しぐれ

こののち信州松代にあって白雄は江戸の友人梧庵に手紙(後掲)を送り、旅中感銘をうけた場所を「高館の覽古や末の松山なんど心とゞまるところ」と知らせているが、右文のように末の松山は確かに「旅情袂にしたツ」場所であったのである。

秋時雨に心配していた天候も八月十四日はからりと晴れて塩竈湾の月を詠めることができた。籬が島(籬島)は塩竈湾のうち最も陸地に近い島で『奥州名所図会』巻三に「塩浦第一の名島にして、青松緑竹、千載の昔にかはらず、景色更に云ふべからず。」

○ 曲木明神鎮座、すなはち一宮の末社にして、本社を去る事、海上ともに十八丁。例祭七月十一日を以てす。島中の白砂

に交はり、梅の花貝あり。古来、歌仙貝の中に収めて翫弄する人多し。」と記されている。

千賀は塩竈の別称。『奥州名所図会』巻三に「千家塩竈。塩竈浦と称し、千家浦とも称す。歌枕に血鹿また千賀に作る。」とある。

白雄作は松宇文庫本では

雑魚小海老まつにかひ有千賀の月

と初五、中七が大きくかわっている。塩竈は古来「浦、磯、瀉、いさご、月、雪、行舟、苫屋、蟹、塩藻の煙、松、釣舟、我せこを都にやりて、籬嶋、浮嶋、八十嶋、白河関」(『佐夜中山集』)を詠むものにきまっていた。白雄は「待つ」に松を懸けているようだ。しかし初五は難解、ここは「蟹」「釣舟」の縁によるものであろう。

旅行後、信州松代から江戸の梧庵に宛てた手紙の中で、

瑟瑟たる秋雨に三夜の月おぼつかなく、塩竈の浦に日和まちせしに、千里を近うあゆみ来し風運尽ざるにや、籬が嶋ちかく月まつ宵のかけをむかふ。猶松しまの松を友とせるあすの夜をちぎりて、

たのもしやまつにかひある千賀の月

是は十四日の句にて御坐候キ。

とやや異なる作品を紹介している。

塩竈の宿で鱸魚のちそうになったことが松宇文庫本に記されている。

鱸魚の鮮けきを調じて宿のあるじの酒すゝめけるに

ワすれじよ秋風ふかば千賀の浦

秋風がふいたなら「松江の鱸」ならぬ塩竈湾の鱸のうまさを思い出すことだろうの意。美味の発見は旅のたのしみの一つでもある。

翌日の松島の良夜は、まさに風運に恵まれて満月であった。この時の詠

松ふくやまつしまの月夜半過ぬ 白雄

は、松宇文庫本では

望の夜、清光夜半に京極黄門の和歌を謡ふ客有。

松かぜや松嶋の月夜半過ぬ

さらに長翠の『くろねぎ』では、右とほぼ同様の前書で「松ふくや…」の句が収録されている。「松かぜや」は誤写であろう。

白雄は松島において定家の和歌を聞き、右の句を作ったことが知られるが、それはいかなる歌であったのだろうか。梧庵に宛てた白雄書簡(後掲)では、

松島良夜

松ふくや松しまの月夜半過ぬ

かたぶく月のおしきのミかハと聞へしをおもひあはせしのミ。爰景に対して恥入申候。

十六日雨ふりて

いざよふや知らず雄島の雨の月

と定家の和歌の一部が記されている。つまり

後京極摂政、左大将に侍りける時、月五十首歌よみ侍りけるによめる

あけば又秋のなかばもすぎぬべし

かたぶく月のをしきのミかは 定家

(『新勅撰和歌集』第五秋)

に触発されて「松ふくや」の句を詠んだというのだが、そういわれてみなければよくわからない句作りである。歎楽極りて哀情多しのたとえで待望久しい松島の観月もそれがいざ実現してみれば、あとはさびしい松籟のみが身にしみるといのである。白雄は時に三十六歳であったが、登り坂の境涯に似合わない老境の句境である。

さてこの作品にも次のような自筆句箋（屏風）が伝わる。

千里を遠しとせずあゆみこしかひありて三日の雨江のうちに晴たり。

松ふくや松しまの月夜半過ぬ

「瑟々たる秋雨」は三日間降り続いたことが知られる。

八月十六日も白雄たちは松島に泊りいざよいの月をながめようとしたが、昼間から雨に降られて雄島の観月も実現しなかった（二五）。この時の白雄作、初五が「いざよひや」という句形の作品もわずか伝わる（『今古家集』）が誤写であろう。

松島をあとにした白雄たちは一路平泉をめざした。

高館の覽古心にこめて右ひだり蒼樹を友に杖ひく折から左沼の酔石我をむかへんと遠きを遠しとせず馬にまたがりて声をかく。まことに同門のちなみ浅からずもやがて山笑庵にともなはれ侍る。

並松の露へだてなきちぎり哉

（『白雄贈答』）

酔石については後述するが、当時伊達領であった宮城県登米郡迫町（佐沼）の修験者で表2にみるように熱心な鳥酔門人であった。白雄が佐沼を経て平泉に行くことはすでに船岡の也寥から連絡がついていたのであろう。白雄たちを馬で出迎えた。この時の風交は両者にとってかなり意義深かったとみえて酔石はこのち白雄が鳥明から破門されてもそのまま天明四年（『春秋稿』四編）まで白雄の編著に投句を続けている。酔石は天明五年頃他界したものであろうか、『春秋稿』五編のみ作品がみえない。

平泉は本来歌枕ではないが、芭蕉の発見によって近世中期以降は俳枕(『俳諧名所小鏡』)になっていた。白雄も当然そのような意識から訪れた。

松宇文庫本は前の句の前書がやや長い。

高館覽古、何いひけんも兵どもが夢の跡にぞ有りける。

ちる柳たゞ塊の西ひがし

光堂拝ミテ

風瓢と光身にしむ巻柱

高館(三六)は先にも梧庵宛て書簡で紹介したように、この旅行において末の松山とともに白雄が最も感動した場所であった。鎌倉を逃れた義経は秀衡の保護のもと中尊寺の東方、北上川を臨む丘陵高館(判官館)に住んでいたが文治五年泰衡の急襲をうけ、戦死したといわれる。白雄作「ちる柳」は高館に隣る豪壮な居館柳御所の暗喩であろう。柳御所ははじめ藤原清衡、基衡の居館であったが「後前民部少輔藤原基成之に居り源義経も亦都を落て秀衡の許に來りし其始め之に居りしなり。此館は高館の下にして東にありと云」(高平真藤著『平泉志』明治二十一年刊)。

高館も柳御所も現在はその大半を北上川に侵蝕され、特に柳御所は完全に川原と化している。白雄はその現場に立って散る柳とともに往時の豪壮さと眼前の塊の原をかみしめた。「西ひがし」はその遺跡の広さそれに比例するむなしさの表現である。

光堂(三七)は清衡が中尊寺の中に建立した阿弥陀堂で清衡のほか子の基衡、孫秀衡三代の遺骸(ミイラ仏)が収められている。方三間宝形造で内部はもちろん屋根や軸部まで漆や金箔を押し豪華に仕上げであった。白雄作の巻柱は「環帯で四区に区劃され漆地に蒔絵や螺鈿の象嵌で仏形や宝相華文様をあらわす。亀裂を防ぐため桶のように数枚の板を締めて中空に造られ、十幾層にも塗った⁽¹⁴⁾」ものである。「ふりし代のひかり」は、その象嵌された螺鈿貝の反射光である。

松宇文庫本の初五「風瓢と」は誤写であろう。同音の類語を諸橋大漢和よりあげると、風颯（つむじかせ）、風颯（あらし、はげしい風）、風標（おもむき、ありさま）などあるが、ここでは字形より類推し、風颯あたりであろうか。いずれによせ「ふりし代の」とは句の趣が大部異なる。巻柱の発する何百年の風雪に耐えたものがこの身を圧倒する、程度の意味であらうか。

『俳諧古にし夢』（安永二年刊。烏明ら編）の巻末には「文通」として

高館覽古

柳ちるやたゞ土くれの西東

志ら尾

ひかり堂

うら枯や時代のうつる光堂

斗墨

暮はやき山やつくくひかり堂

烏光

志ら尾主人及び斗墨、烏光の両子を領路してともにむかしをおもふ。

雙くと高萱ならず野分哉

佐沼酔石

の四句を紹介するが、酔石が案内役に立ったことが知られる。また、白雄作初五が異り、右の形が初案なのであろう。

平泉一見後白雄たちがどのようなコースをたどって最上川（二八）に至ったか定かでないが、『俳諧袋表紙』に古川（宮城県古川市）の玉英が出句しているところを見ると、平泉から一関、古川、鳴子を経て出羽に出たものであろう。

表2のとおり古川には麦雨、可興、玉英といった一門ゆかりの俳人がいた。天明四年六月当時白雄とは対立関係にあった杉坂百明が平泉から象瀉にむかう途中荒谷より古川を訪れ「古川春秋庵は松露庵門人にして予も久しき文の交らひあり。あるじ例事なくいたはり申されたり。詞友誰かれ、わきて麦雨のすき人日々訪ひぬ。」（百明著『奥往来』）と同門の多いことを記している。右の春秋庵は可興か玉英であらう。この号ははじめ鳥酔門の山鯉が深川で名乗ったが、没後、安永九年白雄

が日本橋に開庵、継承して一般に知られた。それに対抗した烏明が古川の某に与えたものであろう。

出羽の国に入て

鶏頭やみちのくは跡になりしかど

(神宮文庫本『白雄句集』)

はこの折の吟である。

出羽には尾花沢、大石田、立石寺、出羽三山等多くの『おくのほそ道』の旧蹟があるが、『奥羽記行』に記されているものは最上川(二八)のみである。最上川の乗船地について記した安永期の真蹟幅が伝わる。

ふるくちといふところより船をうかべて兩岸の猿声をおもひあはせぬ。

鷺の声落すなりもがみ川

ふるくち(古口)は最上郡戸沢村古口で芭蕉が舟を乗りかえた地である。

前文の「のぼればくだるいなふねの」は、『古今和歌集』卷二十東歌の

最上川のぼればくだる稲舟の

いなにはあらずこの月ばかり　よみ人しらず

をふまえている。「一鳥の声」は当然鷺(かしどり)の声である。この鳥は櫃の実をついばむことから櫃鳥かしどりともいわれているが、色の美しいわりに声はジャージャーと鋭くさわがしい。白雄は他にきわだつこの鳥の悪声を三峽の兩岸に啼く猿声(李白「早発白帝城」)に聞きなし、一句の俳味としている。

歌枕最上川は古来「水鳥、いなふね、瀬々の岩かど、さみだれ、やかたをの鷹、時雨、紅の花」(梅盛編『俳諧類船集』)を詠むものとされてきた。

もがみ山すがけせしより心有て

まもりかへせるやかたおの鷹 家持

最上河いな船のミハ通ハずて

おりのぼり猶さハぐ芦鴨 源順

(『松葉名所和歌集』)

白雄句の鷺はまた、右のやかたおの鷹、芦鴨の俳諧化ともいえるようだ。

『俳諧帛表紙』における出羽の俳人は表2にみるように五百川の羽扇のみである。五百川は郡山市にもあるが、羽扇の住む五百川は山形県長井市五百川(いかがわ)である。出句傾向よりみて鳥明門下であろう。相当熱心な俳人であるが、白雄がわざわざ五百川まで足を運んだとは考えられない。

最上川を一気に下った白雄一行は、当然酒田に足を入れたことであろう。

新米や坂田ははやき江戸廻し 白雄

弘化三年刊行の『類題狭養集』(碓嶺編)や没後刊行の日本全図などに出る句だが、蕪村の

新米の坂田は早しもがみ河(天明四年刊『蕪村句集』)

と混同したものであろう。この句は確かな白雄文献中には現われない。なお子規の『俳家全集』には「坂田」が「高田」と誤写されている。子規は『俳家全集』の編集にあたって直接原典によるところが少なく『類題狭養集』など化政・幕末の類題集から多くの作品を採っているが、この編集方針は右の句にみるように誤りが生じやすい。

吹浦(二九)は、酒田より海岸沿いに象潟にむかう途中、鳥海山下の漁村である。芭蕉も象潟への往路ここで一宿し「あつみ山や吹浦かけて夕涼み」の作を残している。元禄四年ここを旅した水戸の丸山可澄はその折の『奥羽道記』に

吹浦 坂田へ六里 此間浜辺故駅次無し

宿中左二明神社松山アリ

此間浜辺砂路何の風ニも沙吹上旅行難儀之道也 惣々此海辺漁師多し塩竈数ヶ所有

と厳しい漁村の様子を報告している。

白雄作品は、そこで出会った貧しく、身なりかまわぬ海人の髪をあたりの枯生の薄に重ねて詠んでいる。「かれふ」は草の枯れた地を意味する。吹浦はいままで白雄が作品を詠んできた歌枕や俳枕ではなく、ふつうの名もなき寒村である。したがってこの句は、他の作品のように俳人としての義務感から詠んだものではなく、どうしても詠まずにいられなくなって詠んだ作品であろう。

安永期の真蹟懷紙に初案と思われる次のような句形が伝わる。

酒田の湊をたつて磯づたひゆくほどに

ふくうらや枯生の小草海人が髪

白雄が実際にみたのは丈の短い草原であった。それを枯薄に転じ、海人の蓬髪の隠喩とした。世の片隅に生きる名もなき人々を発見した旅人の新鮮な、しかも心のこもった驚きである。海人はこの場合老いた男の漁夫であろう。

象潟(三十)は、日本海側最大の名所で芭蕉も白雄もここをみ終わると折返すように帰っている。

白雄作品は自身代表作と置いていた様子で管見の真蹟中、最も数が多い。文章も異同が多く次第に形を整えていった過程がわかる。まず象潟汐越の肝煎金又左衛門のもとで執筆した『旅客集』(現蚶満寺蔵)中の俳文を紹介しよう。⁽¹⁵⁾

見かへる磯ワづかに隔て長鯨沫を噴といへどもいたぶる浪のとゞかざる象潟の閑なるを感じツ、桜がもとに春を想し、合歡の木かけに其实を拾ふ。祖翁の顰を恸ふに似たり。これかれ秋の日や、斜に風景猶一瞬に転じて仰しツ俯しつなごりあるゆふべとはなりにたり。

高波や象泻は虫の藻にすだく

安永二年秋九月四日 東武志ら尾坊

この文章が最も古く、しかも象瀉訪問の日時が明らかになって貴重である。右の傍点部分が大きな異同箇所である。それからおよそ二、三ヶ月後には次のように推敲され、江戸の梧庵に報告されている（安永二年冬書簡）。

見かへる磯ワツかにへだちて沖津しほさゐいと白かれどいたぶる波のとゞかざる閑なるを感じつゝ桜がもとに春を想し、合歡の木かげに其实を拾ふ。祖翁の顰を働ふに似たり。これかれ秋の日や、斜に風景猶一瞬に転じて仰しツ俯しツなごりあるゆふべなりけり。

高波や象瀉は虫の藻にすたく

天明初年と思われる真蹟は（二九）とほとんど同文だが「春をしおもひ」が「春を想し」、「仰ツ」が「仰しツ」とかわっている。他の天明期の真蹟で異同の認められるものは、福生市中央図書館森田文庫の蔵幅で、「祖翁」が「蕉翁」に、文末が「俯しつそのゆふぐれをおしむ」となっている。このほか拙著『俳人白雄人と作品』に掲出した天明期の真蹟や長翠編『くろねぎ』所載のものは紀行とほぼ同文である。

松宇文庫本は所々小異が認められるが、それは誤写から生じたもののように本質的な差異は少ない。参考までに全文を掲げる。

見かへる塚わづか（ママ）にへだちて興津しほさゐいとしろかれどいたぶる涛のとゞかざる象瀉の閑成を感じつゝ桜が元に春をし想ひ、合歡の木かげに其实を拾ふ。蕉翁の顰を働ふに似たり。これかれ秋の日や、斜に風景猶瞬に転じて仰しつ俯しつ余波あるゆふべなりけり。

高涛や象瀉ハ虫の藻にすたく

さて句文の解釈に入るが、文中の桜は『おくのほそ道』に「花の上こぐとよまれし桜の老木西行法師の記念をのこす」とあるもので

象瀉の桜は波に埋もれて

花の上こぐ蟹の釣り舟

伝西行

西行の作かどうか明らかでない。

「合歡の木かげ」は芭蕉のここでの名吟

象瀉や雨に西施がねぶの花

の合歡の木である。

句初五の「たか波」は遠方外海の「おきツしほさる」である。次にそれと対比するかたちで穏やかな象瀉湾の一点景（藻に鳴く虫）を描く。歌枕象瀉は古来「左迂、蟹咎屋、旅寝、豊岡姫、鴈、千鳥、磯、柴扉、モシホ草」（『詞林名所考』）を詠むを例としているが、白雄もそれを承知していたことが知られる。

桃隣の『陸奥衛』に「昼夜潮の指引有て満干毎に瀉の姿異也」とあるように、象瀉はむしのすだく夕方になると汐もかわり、湾内の「風景なを一瞬に転」ずるのである。海岸にうち寄せられた海藻に鳴く虫は外海の厳しさも知らずあたかも秋の名残を惜しむかのように鳴いている。

この発句は、遠近の構成も整い、格調も高く、『奥羽記行』を代表する佳作といつてよい。

(三一) 鳥海山は象瀉の背後にそびえる標高二二二六メートルの火山で出羽富士と呼ばれるように姿が美しい。北斜面は秋田県、山頂は山形県に属している。

松宇文庫本は前書が長く、句にも異同がある。

鳥海山ハ海中になり出たる所五里ばかり。

故に船の行ゆき(海)かひ雨に日和におそるゝとかや。

かた尾根ハ霧のあなたにワたつ海

鳥海山は鎌倉時代より修験道場として広く全国に知られた霊山で、山形側は天台宗本山派、秋田側は真言宗当山派に分かれ

ている。白雄はその霊山の威力を叙景をもって写生的に表現したのである。松宇文庫本のように長い前書きがないと単なる叙景句と誤解されるおそれがある。

なお松宇文庫本は、(三二一)と(三三二)の間に「此あたりの吟」として次の発句四章を掲げる。つまりこの部分のちに紀行一巻の首尾を整えるにあたって削除された部分である。その意味では松宇文庫本は『七とせの秋』本より古い形をとどめていることがわかる。

此あたりの吟

- 1 稲妻やいづれ礒家ハあさまなる
- 2 吹尽し後ハ草根に秋の風
- 3 秋の夜や礒の匂ひのものに付

自他共白骨

- 4 野ざらしを見て通りけり秋の雨
- 1の句は神宮文庫本『白雄句集』では
いなづまやいつも礒家はあさま也

とあるが天明朝の真蹟や『しら雄く集』に紀行と同形が出るから誤写の可能性が高い。

2は後年門人葛三らによって相模大磯の鳴立庵に句碑が建立された。白雄自身『春秋稿』初編に出しているから自信作であつたのであろう。

3はのちに次のように改案された様子で

長き夜や礒の匂ひのものにつく

神宮文庫本『白雄句集』『しら雄く集』『八翁六百題発句集』等に収められている。確かに意味の上からも「長き夜」の方が

すぐれている。

4は穏やかならぬ句だが、当時はそう珍しいことではなかったであろう。この作品は天明期の真蹟(『春秋稿』八編に模刻)や神宮文庫本『白雄句集』『しら雄く集』『八翁六百題発句集』等に収められているがひとつ不審なのは「明和九年春三月 志ら尾坊」と巻末識語に記す写本『鳥酔翁遺語』にも出句していることである。明和九年は奥羽紀行の前年に当り時間的に合わない。いずれかが誤りということになる。

白雄らは酒田、鶴岡と通過、九月九日山形県西田川郡温海町小国(三二)に到着した。菊の節句の日である。泊った宿の主人が風流心を発し茱萸等をもって一行をもてなしてくれた。小国は小国川の河口からおよそ七・五キロ上流にある小国街道の山間の宿場で、天明八年には家数が百十一軒、人口が五五一人であったという。当時旧小国城のあった楯山麓に庄内藩による関所があり、上番士一人、下番士二人が詰めていた。ここを過ぎればまもなく越後である。

『おくのほそ道』の旅において芭蕉は十六日間、およそ八十里余を越後に費しているがその記述はしごくあっさりしたもので「此間九日、暑湿の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。」と片付けている。その理由は、度重なる不快事件等種々考えられるが、最も大きな理由は、芭蕉の通過した道筋に歌枕がほとんどなかったということであろう。芭蕉が見たであろう近世初頭の歌枕集、名所和歌集の中から越後の歌枕を探すことは至難のわざである。たとえば寛文十一年写の『楯山拾葉』、同十年刊『随葉集大全』、延宝六年刊『名所小鏡』、寛文十二年刊『増補名所方角抄』、刊年不明『詞林名所考』などにはまったく見当たらないし、万治二年刊の『詞枕名寄』では北陸の部に「越後哥未勤 佐渡」とあるが越後の項の記事を欠いている。また万治三年刊の『松葉名所和歌集』では巻十二にわずかに「佐渡海」を一首掲げるのみで越後は皆無である。『おくのほそ道』の旅は、後半にいたってもなお当初の歌枕探訪という目的を失っていかなかったことがわかる。

さて白雄も右の芭蕉の例にならったものか奥羽紀行に記す越後記事はわずかに弥彦山と出雲崎のみである。白雄時代の越後の文学的な名所を蝶夢編『俳諧名所小鏡』(天明二年・寛政七年刊)から列記すると、次の十八カ所の多きにのぼってい

る。

歌浦・親不知・駒還・黒姫河・越長浜・柏崎・柿崎・米山・出雲崎・有明浦・瓶破坂・弥彦社・狭渡・八瀑布・宏智
法印・鳥屋野・単関・根屋鉾立

中には宏智法印のミイラ仏まで入っており、近世庶民文学（俳諧）の拡大、開拓が実感される。

（三三）弥彦山の白雄詠は松宇文庫本と『くろねぎ』に「やひこ山の紅樹に題す」の前書きで出句する。この前書きの改変には明らかに紀行文の意識がひそんでいる。前書きに季語を出し、作品を無季にしているのは解せない。内容も挨拶性のみが目立ち空疎な感が強い。

白雄一行は日本海に沿ってそのまま出雲崎に出た。ここは芭蕉がかの銀河の名句を産んだ地で白雄時代はすでに俳枕となっていた。白雄も芭蕉にならって佐渡の孤島にうちむかい銀河を仰いだ。

松宇文庫本は次のように異同がある。

出雲崎程近ミ佐渡の孤洲に打向ひ行、荒海や布帆の行かひだもたえて銀河の外梁せるものハさらにあらじな。

佐渡遠く木がれに渡る鷹もがな

『くろねぎ』は

出雲崎ほど近く佐渡の孤洲にうちむかひて

佐渡遠く木がくれに渡る鷹もがな

初五、中七ともそれぞれ形が異り複雑である。まず、松宇文庫本のあり方（既述）からみて、初五「佐渡遠く」が初案であろう。中七は両本に「木」と漢字表記があるところをみるとやはり木隠れ（木の陰に隠れること）が正しいようだ。つまり初案は

佐渡遠く木がくれに渡る鷹もがな

であったと思われる。

鷹は冬の季語であるが、北方から渡ってくるのは隼やちゅうひの類い、その他刺羽(さしば)、のすり、はいたか等日本で蕃殖していた鷹は冬南方に渡ってゆく。このほか鷹狩りで使った大鷹のように留鳥のものもある。

右の初案の鷹は、佐渡にむかって飛ぶ鷹であるが、『七とせの秋』本では逆に佐渡から本州にむかってくる姿に換わっている。

改案の「こがれ」は「木隠れ」の誤写か「焦がれ」(恋い慕う)の意か判然としない。いずれにせよ、この情景は白雄が眼前にしたものではなく(願望の「がな」)意中ひそかに描いた願わしい情景であった。荒海の彼方に黒々と静まる佐渡が島、その上に輝く銀河の帯、そこを精悍な鷹の群が次々と渡って行く―いかにも覇氣の人白雄の描きそうな心象風景である。流人の島、銀河、荒海という芭蕉の創作世界にさらに精悍な猛禽鷹を加えたところに安永期の壮んな白雄の本質がかいまみられる。

出雲崎から信州松代までの足どりは明瞭ではないが『俳諧帛表紙』に出句する越後俳人は上越市高田の一音と泰亀、新井市の鷺大、十日町市の山之の四人である。

泰亀は高田中小町の人。本名河野平八(可都里『名録帳』)、俳号を麦朝庵(『蕉門むかし語』)といった。麦水や涼帛の春帳に出句している。白雄俳書では『おもかけ集』と『俳諧帛表紙』の二冊にしか出句しない。

十日町の山之は本名上村与兵衛、樗良の熱心な門人で師のために追善集『雪之集』を刊行している。やはり他門ゆえか『俳諧帛表紙』しか出句がない。

出雲崎から信州松代に至るには、日本海沿いに直江津まで下り、内陸部へ左折して、北国街道を高田、新井、長野、松代とたどるコースと出雲崎から小千谷・十日町を経て千曲川添いに飯山、中野、松代に至る二つのコースがある。当時において前者の方が一般的であった様子である。『俳諧帛表紙』に出句する越後俳人は右の二コースに分割され、迷わざるを得

ないが出句者の傾きよりみれば日本海沿いコースをとったものと推察される。

信州松代には九月下旬頃の到着であろうか。十月十二日の芭蕉忌は松代證蓮寺において主催し、多くの人々に『枕表紙』を披露した。

場所は特定できないが白雄は旅行中

朝虹の高灯籠にかゝりけり 志ら尾

を作り、上毛の同門に通信している。この句は従来知られない新出作品である。

これは上毛沼田の烏明門人泥亀と同じく師田の烏毛が安永二年九月改号した折の記念一枚刷に収録された作品で

自賀名改の二章

呼ふりし表号をあらためいさゝか替の字に重陽をよせて寿ぐ

脱替て菊の香とめん九日小袖 上毛沼田百鳥改 泥亀

星野氏の名改にすがりて我も又

漂の名も新らしう呼べ菊の宿 同師田麦粒改 烏毛

秋 興

夕暮やなぐれて渡る雁の声 烏毛

眠蔵へ蜻蛉さきよふ野分哉 泥亀

ミちのく行脚の文にきこゆ。

途中の吟

朝虹の高灯籠にかゝりけり 志ら尾

東武朶雲

鹿啼て尾上隠るゝ雨気哉

百明

琴の緒の切て響ける夜寒哉

松露主人

癸巳晩秋

右下隅と左上隅に菊花の図が添えられ、板下は烏明の筆になる。

註

1. 坂井永一氏蔵。
2. 「下総蕪里の俳人玉斧(中)——両総俳壇の展開とともに——」(加藤定彦稿。「立教大学日本文学」六十二号。一九八九年七月発行)。
3. 「続俳人の手続 附一枚刷」(矢羽勝幸編・日本書誌学大系71。青裳堂書店、平成七年六月刊)二九三頁。奉書折紙一枚。「良夜」の題で三十名各一章を収む。別格として志ら尾ら掲出三句、百明・孚石・烏明の各一句がある。反面は岷江による楼閣図。板下は烏明。
4. 「角川日本地名大辞典、栃木県」(同編纂委員会・竹内理三編。角川書店。昭和五十九年十二月刊)。
5. 「俳豪鳥酔」(天野雨山著。蕉風社。昭和八年三月刊)。
6. 「白河市史」十卷(同市編・刊。平成四年刊)。
7. 「都のつと・奥羽道記・はなひ草大全」(村松友次編。古典文庫。平成七年六月刊)。
8. 「本宮町史」十卷(本宮町編刊。平成五年刊)。
9. 「俳人加舎白雄と門人たち」(矢羽勝幸編著。上田市立博物館刊。平成二年十月)。
10. 「宮城県史」14文学芸能(宮城県史編纂委員会編。県史刊行会刊。昭和三十三年一月刊)五一七頁。
11. 也寥詳伝は拙稿「俳人也寥禅師伝」(「黒姫」一四四——一四六。昭和四十二年一月——同四十二年四月)。
12. 「俳人白雄 人と作品」(矢羽勝幸著。信濃毎日新聞社。平成二年十月刊行。)七三頁。
13. 「大歳時記」三卷(大岡信ら編。集英社。平成元年十月刊)。
14. 岩波写真文庫「平泉」(岩波書店編・刊。昭和二十七年八月刊)。
15. 古典俳文学大系十四「中興俳論俳文集」(清水孝之・松尾靖秋編。集英社。昭和四十六年七月刊)口絵写真。
16. 加藤定彦氏蔵幅。